MARUBI
富士吉田市歴史民俗博物館だより
25
2005.11.30
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY NEWS

■檜丸尾の赤松林（博物館エリア内）

富士吉田あれこれ

まるび

この博物館だよりのタイトルに使用しているMARUBIは、漢字表記では「丸尾」と書き、その語意はこの地域の溶岩台地を表していることは、これまで巻末への記載やホームページ上でも紹介してきました。しかしながら、あまり聞き馴れのない表現であるため、馴染みのない方はちょっと引いてしまうのかもしれません。それというのも一昔前によく用いられた「㊙」を連想してしまうようで、実際に「何故、そんな貧乏臭さを思わせるタイトルを使用しているのか」といった懐疑的な問い合わせを受けることが多々あります。

丸尾は新富士火山期（６２００～）に流下した、新期溶岩流のことを指します。この溶岩台地は現在の市街地となっている範囲にも広がっています。大規模なものでは、市域の西側を流下した「剣丸尾溶岩流」、東側を流下し、この博物館が立地している「檜丸尾溶岩流」があります。これ以外でも市域には溶岩は流れており、古来から、この丸尾を切り開いて耕地に変えることは、並々ならぬことでした。それともいうのも高冷地であり、火山灰の厚く堆積した土地では農業生産という面で厳しい環境にあります。この地域で織物が盛んになったのは、農業生産を補うための手段として始まり、その後発展していったという経緯があります。加えて、周囲を山に囲まれ、裾野に広がる火山性扇状地の土地は決して広くはありません。人々が生活の糧を得ていくには、丸尾を開発していくほかはなかったのかもしれません。

江戸時代は開発の時代ともいわれています。新たに耕地を切り開くためには丸尾の開発が必要不可欠であり、剣丸尾の開発には「新倉掘抜」という用水トンネルを用いて河口湖の水を山一つ隔てた新倉地区へ流すという、当時、村単位で行う普請（工事）としては壮大なものでした。

現在でも、埋蔵文化財の確認調査のために試し堀りをすることがあります。耕作地になっているところでも１mも掘ると溶岩の岩盤にあたってしまうところがあります。１mとはいえ、広大な範囲に客土をおこない、耕地として生産ができるまでにした人々の努力には頭が下がります。

また、この丸尾の開発には興味深い伝承も残されています。それは「雪代（ゆきしろ）」を利用した開発方法です。『雪代とは、通常、春になって山の雪がとけて川水の増すことをいい、「雪代が出た」と表現されることが多い』（『国語大辞典』など）と記されています。富士山の雪代は春先の急激な気温上昇にともなって起こる融雪による土石流で、その記録上の初見は、天文14年(1545)2月の『勝山記』（妙法寺記）からみられます。ひとたび発生すると麓の村々へじん大な被害をもたらしたものですが、その一方で丸尾の開発に一役買うことがありました。小規模な雪代の場合、雪代の流れたところへ鋤簾をもって駆けつけ、先を争って土砂を流す溝を付け、岩だらけのところへ土砂を誘導したものだったとの伝承が残されています。家々を飲み込むような大規模な雪代は願い下げですが、規模の小さな雪代は大いに歓迎されたようです。

市域の特徴をよく表しているコトバである丸尾には、耕地開発に伴った人々の絶え間ない努力が刻みこまれています。現在ではあまり見ることができない丸尾の景観ですが、この博物館のエリア内では観察することができる貴重な場所となっています。富士吉田の自然の景観と歴史を伝えていくものとして、これからも胸を張って丸尾（MARUBI）のタイトルを使っていきたいと考えています。

（布施光敏）

博物館Report

平成17年度　博物館講座
「モノから調べる富士信仰」

はじめに

博物館では平成17年5月29日（日）と6月4日（日）の2日間「モノから調べる富士信仰」と題した講座を開催しました。この講座では、富士山を信仰する人たちが寺社に奉納した石造物などのモノ資料を、参加者が現地で実際に調べることにより、富士信仰の歴史を身近に感じてもらおうという内容です。今回の講座では、静岡県の駿東郡小山町にある須走浅間神社と御殿場市上小林の東岳院に足を延ばしました。

須走浅間神社は、吉田口の北口本宮冨士浅間神社と同様に、古来から須走口という登山道の基点として重要な位置にある社でした。その境内には須走口を利用した人々が建てた多くの石造物が残されています。また、御殿場市の東岳院には富士講の人たちが参詣していたキヤリ地蔵という地蔵尊があり、その境内にも多くの石造物が奉納されています。

■須走浅間神社の石碑群

須走浅間神社

須走は富士山の登山口の1つで、集落には登山客を泊める御師が集住していたところで、現在でもその宿の名残りがみられます。須走浅間神社はその集落の西の端に鎮座しています。富士講など、須走の登山道を利用する人々は、この浅間神社を基点として富士山に参詣登山しました。

須走浅間神社の主神は木花開那姫命（このはなさくやひめのみこと）で、その他に大己貴命（おおなむちのみこと）と彦火々出見命（ひこほほでみのみこと）も祀られています。

■須走浅間神社

神社の創建は社記によれば平城天皇の大同2年（807）と伝えられています。神社創建の前、延暦21年（802）に富士山の東側が噴火し、富士山の東麓は大きな被害にあいました。その鎮火祈願のため、祭場を設けて祭事を行いました。そうしたところ、同じ年の4月の初申の日に噴火が収まったので、富士の神に感謝して、須走に神社を創建したといわれています。

境内には、江戸時代後期以降の大小多数の石造物が奉納されていて、その多くが富士山の信仰と関係しています。

平成17年度　博物館講座

「モノから調べる富士信仰」

須走浅間神社の石造物の調査

■講師による解説

講座の初日は５月29日の日曜日でした。初夏の日差しがサンサンと降り注ぐ、暑いほどの日よりでした。参加者14人は９時に博物館に集合し、博物館の車で現地に向かいました。10時に須走浅間神社の駐車場に到着。神社の神主さんの挨拶をいただき、講師の帝京大学山梨文化財研究所の畑大介先生から石造物全般についての解説を受けました。

富士講の石造物

歴史学の世界では道端に建っている石の地蔵や道祖神など石で作られたものを石造物と総称しています。石造物の中でも富士講によって奉納された石造物を特に「富士講碑」と呼びます。富士講碑は富士吉田をはじめ、富士山をめぐる地域に特に多く見られ、他の地域ではあまり見られません。

そもそも富士講というのは、江戸時代に始まった富士山を信仰する団体のことです。江戸の町には800以上の富士講があったといわれています。江戸時代以前にも富士山を信仰する人たちは存在していましたが、宗教として組織化されたのは江戸時代に富士講が成立してからです。この富士講は江戸から近代に盛んになり、今では数少なくなりましたが、現在活動を続けているグループもあり、年に数回富士山に登山に訪れています。

富士信仰では、33･55･77回など一定の回数登山をすると、登山道や神社の境内や、宿坊としている御師の家の敷地に記念碑を奉納することが多くみられます。これが富士講碑です。

富士講碑には他にも、「御中道巡り」や「八海巡り」などの修行を終えてから、記念に建てたものもみられます。そのため、富士講碑の表面には「登山三十三度大願成就」というように、達成した記録の内容を刻んだり、それに携わった富士講の講社名やその指導者である「先達」「講元」「世話人」などの氏名が彫られています。また、富士講碑の最大の特徴は、笠印と呼ばれる講社のマークが刻まれていることです。講社ごとに異なるマークによって、その石碑をたてたグループがどこに属するものかが一目でわかります。

石造物を調べるときには、笠印の形状や図柄表面に刻まれている文字を読み解くことで、その富士講碑がどのような理由で建てられたのか、どの講社の誰が参加しているのかがわかります。

講座では、参加者による石造物の計測、刻まれている文字の判読を時間の許す限りおこない、資料化しました。また、石碑の表面の摩滅した文字を読むために、「拓本」という石造物を汚さずに墨で型をとる手法について、講師の畑大介先生の指導の下、学習しました。

■マルサンの笠印

■ヤマサンの笠印

■刻字の記録

■拓本とり

博物館Report

■笠付順礼供養塔

元禄5年の石造物

須走浅間神社の主要な石造物の中で、特に古い時代に建てられたものは、元禄5年（1692）の銘がある順礼（巡礼）の供養塔です。この供養塔は神社の正面を入ると参道の両脇に対で建っています。表面の文字が磨り減ってしまい、詳細がわかりませんが、「順礼」と刻まれており霊場を参拝してまわった人たちの記念碑です。この供養塔には富士講の笠印が刻まれていません。富士講の石碑が盛んに建てられる1700年代より以前に建てられたものということもありますが、富士講の奉納した石造物ではありません。富士講という信仰団体が生まれる以前の素朴な信仰の記念碑なのかもしれません。

丸三伊藤四谷講社の碑

須走の浅間神社境内には、ひときわ大きな自然石でできた富士講碑がありました。この石碑には丸の中に参という文字が入った笠印とその文面から、丸三伊藤四谷講社（まるさんいとうよつやこうしゃ）の建てた碑だとわかりました。

丸三伊藤講社は明和3年(1766)に没した安藤富五郎が講祖となって始まった古くからの富士講の講社で、東京の滝野川、四谷、十条、千住、本木、花又などに枝講がありました。また、この講社は市内上吉田の中宿にある石垣幣司屋（いしがきへいじや）という御師を宿としていました。そのため、石垣幣司屋の敷地にも須走浅間神社と同様に、丸三伊藤四谷講社が建立した石碑が残っています。

離れた2つの場所に石碑を建立していることから、丸三伊藤四谷講社は富士山に詣でたとき、富士吉田と須走の両方に立ち寄っていたことがわかります。吉田口の登山道から富士山に登り、帰路は降りやすい須走口に下山したこともあったのではないかと考えられます。

■丸三伊藤四谷講社の碑

遠くからの参拝者

富士山の北麓から東側にかけて見られる富士講の石造物の多くは、ほとんどが関東近県の人によって奉納されたものです。しかし、今回調査した須走の石造物のなかには、近畿地方の人が建立した石造物もありました。昭和12年（1937）に登山899回記念の碑を建てたのは、和歌山県紀伊の新宮市の大先達です。裏面には、この先達の世話をしたと思われる須走の支度所の人名や、石碑を彫ったと思われる石工の名前があります。この和歌山の大先達は須走口に深い関係があったものと思われます。

■和歌山の大先達の碑

平成17年度　博物館講座

「モノから調べる富士信仰」

キヤリ地蔵への道標

第2回目は6月５日に実施しました。この回も天候にめぐまれました。調査場所は、御殿場市上小林にある東岳院です。東岳院には、富士講の人も参詣するキヤリ（輿桍）地蔵という地蔵が祀られています。

国道138号から分岐する三叉路には、東京四谷の東運元講が建立した「輿桍地蔵参道」と刻まれた道標がたっています。ここがキヤリ地蔵のある東岳院への参道の入り口になります。国道に面している側面には、「御殿場駅道」と刻まれています。

■参道入口の道標

キヤリ地蔵（東岳院）

キヤリ地蔵のある東岳院は、須走の浅間神社を過ぎて御殿場市に入り、鎌倉街道の古道を南に進んだところにあります。字名は静岡県御殿場市上小林という場所です。東岳院は明治以前は地蔵院と称していました。本堂が地蔵堂で、その中に本尊のキヤリ地蔵が安置されてきました。地蔵院のキヤリ地蔵は富士参詣の道者や大工職人などに信仰されていて、以前は富士登山の帰路に多くの人がお参りに訪れたと伝えられています。

東岳院の前身の地蔵院は、寛政年間（1789～1801）に本堂が初めて建てられたといわれ、現在の本堂も文化４年（1807）に建てられたと伝えられています。その後、明治34年（1901）に神奈川県の東岳院を併合して現在の名称となりました。

輿桍（きやり）地蔵のキヤリという表現は、充てる漢字が異なりますが、大工など職人が重い木材を運ぶときに歌う木遣唄に由来するといわれています。この木遣唄は、伝説の富士山の修行者、「役行者（えんのぎょうじゃ）」が富士登山の祭に、神のお告げにより唄いながら登ったという伝説として伝わっているものでもあります。

東岳院の境内には、石の子宝地蔵の他、富士講が奉納した石碑が、各所に建ち並んでいます。

また、本堂には富士講が奉納した銅製の提灯や多くの木札が奉納されています。

■東岳院の境内

■本堂にかかる山額

■銅製の提灯

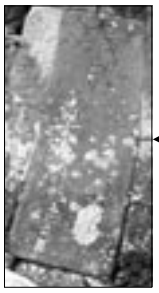
■木札

博物館Report

「浅間大菩薩」の石灯籠

東岳院の本堂に向かって左手前に石の灯籠が建っています。この灯籠は文化10年（1813）の建立で、土台に「奉献　富士出現輿楞地蔵尊　富士浅間大菩薩」と刻まれています。この灯籠には富士講の笠印や講名が刻まれていないので、富士講に直接結びつくものではありません。灯籠の施主の名前を見ると「当村　岩田三良左衛」とあり、地元の人によって建立されたものであることがわかります。奉納したのは「当院発願主現住仙瀛洲建立之」とあり、東岳院の前身となる当時の地蔵院に住んでいた住職ということになります。この灯籠は現在火袋（火を焚く部分）が新しい石材に換えられ、中をくり貫く加工が施されていないため、火を灯すことができませんが、本来はキヤリ地蔵の安置されたお堂の前を明るく照らすための常夜灯として建てられたと思われます。

この灯籠でもう１つ注目したいことは、「富士浅間大菩薩」と刻まれていることです。いまでは「浅間さん」といえば神道の神であり、菩薩は仏教の仏です。しかし、この名称では神仏が一緒になっています。このことから灯籠が建てられた時期には、富士山信仰がまだ神仏習合されていた時期であり、神も仏も混沌とした信仰の形態であったことを表す重要な資料であることがわかりました。



■拡大写真

■石灯籠

吉田口と対応する講社

東岳院の境内には須走浅間神社と同じく、丸三伊藤四谷講社の石碑がありました。須走浅間神社の丸三伊藤四谷講社の石碑は昭和2年（1927）の建立でしたが、東岳院の丸三伊藤の石碑は大正11年（1922）のものです。丸三伊藤四谷講社は上吉田と須走浅間神社に寄り、東岳院にも訪れていることがわかります。

また、富士山の吉田口登山道七合目の鳥居室にマネキを残している東運講が、東岳院にも石碑を建立しています。東運講の石碑は、大正11年の造立で、丸三伊藤の石碑と同年の石造物です。

このように、石造物を調査することで、大正から昭和の初めには複数の富士講の講社が富士吉田と須走を行き来していたことがわかりました。それは、交通の便がよかったということも影響しているのかもしれません。

須走と吉田は富士山の八合目で登山道が合流しており、明治末から昭和の初めの頃は富士の裾を巡って吉田から御殿場まで（馬車）鉄道が敷設されていました。そのため、東岳院に立ち寄るルートが成立した可能性も考えられます。

■丸三伊藤四谷講社の碑

■東運講の碑

平成17年度　博物館講座

「モノから調べる富士信仰」

子宝地蔵

東岳院の境内、本堂の正面に、本尊のキヤリ地蔵とは別に、石造の地蔵があります。地蔵は左手に宝珠を、右手に錫杖を持ち、足元には数人の子どもがいます。向かって右脇の石碑に「子宝地蔵昭和三年七月建立」と刻まれており、子どもを授けてくれる子宝地蔵であることがわかります。地蔵は高い大きな台座に乗っていて、その台座には、複数の富士講の講社名が彫られていました。また、周囲を取り囲む玉垣にも１つ１つの柱に講社名が彫られています。いくつもの富士講の講社が協力して台座や玉垣を寄進したものと思われます。

このことから、キヤリ地蔵のある東岳院は、たくさんの富士講の人が訪れる、にぎやかな場所であったことがうかがわれます。

■地蔵

■「子宝地蔵」の刻字

■子宝地蔵

おわりに

今回の講座は２日間で、のべ30名程の方が参加しました。内容が実践的な講座ということもあり、少ない定員で実施しました。

石造物を調べるということは、日常では縁遠いことです。しかしながら、今回参加された皆さんは、歴史の世界に興味関心が深い方が多く、大きな石造物を測ったり、難しい旧漢字の読み方に苦労しながら、記録カードを作成するといった実践的な調査に取り組んでいただきました。今回のレポートは、参加者の成果が盛り込まれているものです。

この講座の中で参加者の方が一番苦労していたのが、拓本作業でした。拓本は、濡れた紙（画仙紙）を石造物の表面に沿って広げ、水で濡らして字が刻まれたくぼみに紙を押し込むのですが、気をつけないと紙が破けてしまいます。そうして石の表面の形を覆ったまま紙を乾かします。最後に乾く直前の紙に、軽く墨をのせていくと、目視ではわからなかった文字がくっきりと浮かび上がり、判読できるようになります。拓本の作業はそれほど難しいものではありませんが、墨をのせるタイミングが難しいものです。紙が乾いていないと墨がにじみ、また、乾きすぎると石からはがれてしまいます。ほとんどの方が初体験でしたが、最後には皆さん上手に拓本を仕上げました。

富士吉田市歴史民俗博物館では、今後も実践的な調査など体験的な講座を行っていきたいと考えています。皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

また、訪問先の須走浅間神社、東岳院の方々に、色々とご助力をいただきました。

（高橋晶子）

参考文献
●『静岡県の地名』
2000年 平凡社
●『日本石仏図典』
1986年 日本石仏協会
●『上吉田の石造物』
1991年 富士吉田市教育委員会

■講座風景

■拓本とり

Information 博物館からのお知らせ

新刊　案内

富士山叢書『甲斐国志 富士山北口を往く』

江戸時代に書かれた地誌『甲斐国志』の記述をもとに、寺社祠堂、史跡などを解説し、地図と照らし合わせながら文化財巡りができるガイドブックです。

A4版／フルカラー／44頁／190g
価格：1,000円

新刊　案内

平成17年企画展図録『おめでたいカタチ』

平成17年に開催した企画展示「おめでたいカタチ」の展示図録。さまざまなものに意匠化された富士山を取り上げています。

A4版／フルカラー／79頁／370g
価格：1,000円

博物館刊行図録一覧

書　　名	価　格	発行年	重　　量
常設展示解説書	500円	平成7年	B5版／93頁／290g
企画展図録 富士山の絵札	500円	平成8年	A4版／38頁／220g
企画展図録 富士山明細図	1,000円	平成9年	A4版／55頁／280g
企画展図録 絵葉書にみる富士登山	800円	平成11年	A4版／120頁／540g
企画展図録 登山案内図	1,000円	平成12年	A4版／87頁／400g
企画展図録 太々神楽と獅子神楽	1,000円	平成13年	A4版／89頁／350g
企画展図録 富士の信仰遺跡	800円	平成14年	A4版／27頁／160g
企画展図録 冨嶽寫眞	1,000円	平成15年	A4版／63頁／300g
企画展図録 国絵図・郡絵図・村絵図	1,000円	平成16年	A4版／55頁／280g
富士山叢書 富士山道しるべを歩く	1,000円	平成13年	A4版／91頁／180g
富士山叢書 富士八海をめぐる	1,000円	平成14年	A4版／99頁／210g
富士山叢書 富士山周遊図	500円	平成15年	A4版／展開1055_748／110g
富士吉田の民具	600円	昭和59年	B5版／90頁／230g

※上記の他に市史編さん関連図書（富士吉田市史・富士吉田市史研究等）、文化財関連図書（調査報告書）も博物館にて取り扱いしています。
お問合せ：【富士吉田市歴史民俗博物館】TEL 0555−24−2411

富士吉田市歴史民俗博物館
FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご　案　内

開館時間／午前9:30〜午後5:00（午後4:30迄入館可）
休 館 日／火曜日（祝日を除く）、祝日の翌日（日曜・祝日を除く）、年末年始
観 覧 料／大　　人 300円（団体240円）
小中高生 150円（団体120円）
団体割引は20名以上に適用
交通案内／●中央自動車道河口湖I.Cより車で10分
●東富士五湖道路山中湖I.Cより車で10分
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化（変化）したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1　TEL 0555-24-2411　FAX 0555-24-4665
博物館ホームページ URL●http://www.city.fujiyoshida.yamanashi.jp/div/hakubutsu/html/　E-mail●hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp
2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005　FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY
発行／平成17年11月30日　印刷／K2・ONE